〔研究ノート〕

「こころのなかにうたがあるよ」
―アメリカ合衆国における子供向けジャズ教育カリキュラムの一例―

日　高　由　貴

1．はじめに

本稿は、日本時間の2020年８月４日から９日までの５日間、オンラインツールのひとつであるZoomを利用してNYと日本で行われた、こども向けのジャズ教育カリキュラム“I Have A Song Inside My Heart”の紹介と、カリキュラムの発案者であるリザ・プリントアップ（Ms.Riza Printup）氏へのインタビューを通して、ジャズ教育に対する彼女の思想を紹介することを目的としている。

筆者は、これまでジャズを中心として演奏及び指導を行ってきた。そのなかで、「ワークショップ」と呼ばれる、グループでの参加型授業に、日本、およびアメリカにおいて何度か参加してきたが、オンラインでのグループ授業に参加するのは今回が初めてであった。今回の講師は、カリキュラム発案者で、ジャズハープ奏者・ジャズ教育者であるリザ・プリントアップ氏、参加者は、日本でジャズの教育に携わっているピアノ、ヴォーカルの教師６名と、NY在住のクラシック兼ジャズのバイオリニスト１名であった。オンラインクラスは、NYと日本との時差を考慮し、日本時間の午前10時から正午まで行われた。

写真１　クラスで使用された教材（奥左・右）とカリキュラム独自の絵本（手前左・右）

参加申込者には、事前にカリキュラムの資料などを閲覧できるページのパスワードが送られ、Zoomの画面共有機能なども用いて、テキストや楽譜、動画を共有しながら進められた。

教材には、ブルースや、ジャズの「スタンダード[2]」と呼ばれる曲、ジャズの歴史において大きな役割を果たしたミュージシャンのオリジナル曲に、プリントアップ氏が歌詞を書いた歌の楽譜や、具体的な授業計画の例などが掲載されている。また、カリキュラムは、ブルースからアフロ・キューバンジャズまで、時代を追って、その時代の特徴や、代表的なミュージシャン、代表曲のメロディー、特徴づけているリズムなどについて学べるような構成となっている。

著作権にかかわるため、ここでは教材の詳しい内容や楽譜の掲載は控えるが、たとえば、ブルースを学習する際には、

地図をみせながらこどもたちに説明し、音楽だけでなく、そのルーツを、地理・歴史もあわせて総合的に学べることが大きな特徴である。

この点に関しては、後半のインタビューの回答でも述べられているが、本カリキュラムの前提には、音楽の形式だけではなく、ジャズという音楽が生み出されてきた歴史を知ってほしい、というプリントアップ氏の思想がある。

たとえば、ブルースに関しては、カリキュラムの公式ウェブサイトの「わたしたちの使命」というページで以下のような説明がされている。

> ジャズは表現から生み出されたアメリカの芸術形式です。その深いルーツは、アメリカ合衆国に連れてこられ、奴隷にされたアフリカ人たちの労働歌と霊歌にさかのぼることができます。これらの歌は、プランテーション農園や綿農家で働き、生きることを余儀なくされた人々によって表現された、魂のこもった試練と苦難の信仰の証です。これらの歌がブルースを生み出しました。ブルースは、究極の、そしてもっとも親密な自己表現となり、いまもあり続けています。ブルースは、ジャズという織物における豊かな素材であり、生き生きとした糸なのです[3]。

また、授業では、絵を描いたり、工作をしたり、身体を動かしたりといったアクティヴィティや、ジャズの歴史にかかわるさまざまな土地の風景の写真や、歴史資料といえるミュージシャンたちの演奏の動画を見せるなど、年齢の低いこどもも楽しんで参加できるよう、随所に工夫が凝らされている。

写真２　オンラインクラスの様子。左上がプリントアップ氏。

３．カリキュラムが発案されるまでの経緯とプリントアップ氏の理念

続いて、インタビューの紹介にうつりたい。オンラインクラス終了後に、より詳しい話を聞かせてほしいと、プリントアップ氏にインタービューを依頼したところ、快諾を得られた。

―日高（以下、Yuki）：あなたのバイオグラフィー[4]を読ませていただくと、インディアナ大学でク

ラシックのハープとジャズを学び始めたと書いてあったのですが、ジャズハープでしょうか？それともジャズは理論だけでしょうか？

―プリントアップ氏（以下、Riza）：クラシックのハープ演奏は、インディアナ大学でのわたしの学士時代の主題でした。けれども、ジャズにとても興味があったので、主専攻のほかにとることのできるジャズのコースをたくさんとりました（ジャズインプロヴィゼーション、ジャズヒストリー、プライヴェートのジャズピアノレッスンなど）。

―Yuki：ミュージシャンたちは、「彼/彼女らが自分を表現する楽器にであっただけでなく、同時に楽器のほうでも自分を見いだした」というような言い方をすることがあります。あなたがハープという楽器を自分の音楽を表現する楽器として選んだことには、何か理由やきっかけになる出来事があったのでしょうか？なぜこのようなことをおたずねするかと言いますと、ジャズハープ奏者は世界の中でもそれほど多いというわけではないからです。どのようにしてあなたがハープとジャズに出逢われたのかを聞かせていただけたら嬉しいです。

―Riza：

・ハープに関して

わたしは、どちらも、と答えたいと思います。ハープとわたしはお互いを見いだしました。そして同時に、ジャズとも繋がったのです。

わたしはピアノのレッスンを５歳のときに始めました。そして８歳のとき、両親がハープのリサイタルに連れて行ってくれました。そこでわたしは、ハープの音色がなんと美しくホールに響くことか、そしてハープ奏者がどれほど優美に演奏するか、に瞬時に魅せられてしまったのです。当時のわたしは知らなかったのですが、両親はわたしのためにハープのレッスンを調べてくれたようです。けれども、当時のわたしのピアノの先生はそれを認めず、ピアノを続けるべきだと言ったそうです。あっという間に７年が過ぎ、高校時代からの友人のひとりがハープの演奏を始め、わたしは、このユニークな楽器を演奏できたら、どんなに素晴らしいだろう、と思わずにはいられませんでした。当時のわたしは、まだピアノの勉強を続けていましたが、別の先生についていました。３ヶ月後、母にさりげなくこのことを話してみたところ、驚いたことに、両親はわたしの最初のハープの先生となる人のところに連れて行き、紹介してくれたのです。

結局わたしは、ピアノとハープを同時に勉強することになりました。これは、わたしが最終的にハープだけに集中したいと決断するまで、およそ二年続きました。

勉強を続けていた間、わたしはドビュッシー、ラヴェル、ダマース、フォーレ･･･そしてロマン派の偉人たちに恋をしました。かれらのハーモニーとハーモニー進行は、わたしの魂を震わせるものでした。わたしにとって、ハーモニーは、何度聴いてもひき込まれる、耳で聴くことのできる色彩のようなものでした。そしてそれは、わたしにとっては、音楽的に、モネ、マネ、ドガ、ルノワール、

セザンヌ、マティスなどに囲まれているに等しかったのです。

もしも、わたしのなかにハープが融合された時点がいつなのかを辿るなら、1990年にパリで開催された、世界ハープ会議（World Harp Congress[5]）の開会式だといえるかもしれません。ヴェルサイユ宮殿に日帰りで向かっていたある日、わたしは、庭園の真ん中で、話している人々を通してきこえてくる音楽に涙を流している自分に気づいたのです。作曲家たちが、いかに音楽を通して聴衆とコミュニケーションしているかに圧倒され、そして身の引き締まる思いがしました[6]。何百年も経った後にも、彼らは作曲し続けていたのです。
それほど長い年月持ちこたえ、人々の魂に触れ続ける何かの一部にわたしもなりたい、という自分の願いに気づいたのはそのときでした。

・ジャズに関連して
わたしの両親は、つねに家の中で音楽をかけていました。そのなかには、ナット・キング・コール、ルイ・アームストロング、エラ・フィッツジェラルドなどのたくさんのアルバムも混ざっていました。またもや、そのハーモニー、リズム、そしてメロディーに恋をしたわたしは、ピアノやハープで、メロディーをすこしばかりつまみ食いしてみようと何度か試みました。

当時のハープの先生は、わたしの興味を汲んでくださり、ボストン出身のジャズハープ奏者、デボラ・ヘンソン＝コナント[7]のカセットテープをくださいました。
“ジャズ・ハープ”というものをそれまで聴いたことがなかったわたしは、衝撃をうけました。ハーモニーやリズムがそんなふうにハープでスウィングするのをいままで聴いたことがなかったのです。ふたたび魅了されたわたしは、彼女がやっていることを真似しようと、とり憑かれたようになりました。

それからのわたしは、機会さえあればレッスンを受けました。ジャズハープのパイオニアである、ドロシー・アシュビー、アリス・コルトレーン、ステラ・カステルッチ[8]、そこに至るまでのたくさんの奏者に紹介してもらうことができました。そして、メロディー、コンピング[9]、ベースラインをはっきりと理解するために「ハープを演奏する自分のフィンガリングを分解すること deconstruct my harp hands)」を始めました。わたしは、コード楽器であるハープの役割が、ピアノのようにリズムセクションにしっくりなじむことを学んでいました。ジャズの理論はまるでもうひとつの言語のようでしたが、同時に、理論に対する「裏口（backdoor)」のアプローチにも似ていることに気がつきました。いまでは、求められる演奏をするため別の方法でのアプローチであるだけでなく、自分の声（voice）を自由に***創造し（create)、表現する（express）***方法でもあると思うようになりました[10]。

異なる時代のジャズの曲を聴くと、初めてロマン派の時代の音楽を聴き、演奏したときと同じような経験をします。アーティストたちによって書かれ/演奏された曲（ルイ・アームストロングからマイルス・デイビス、ベン・ウェブスターからジョン・コルトレーン、アート・テイタムからセロニアス・モンク、ベッシー・スミスからシャーリー・ホーン）は、表現の探検が永遠に続く宇宙へとわたしを連れて行ってくれたのです。それは、力強く、あたたかく、とても心地よい抱擁のようでした。

標準的なＢ♭の12小節のブルースを演奏できるアーティストはいくらでもいますが、それぞれのアーティストのパーソナリティーと演奏スタイルによって、簡単に区別することができます。同じブルースですが、異なる空気感（vibe）なのです。

大学のクラスメイトが「ジョン・コルトレーン＆ジョニー・ハートマン[11]」というアルバムを紹介してくれたことを覚えています。このアルバムでは、コルトレーンのレギュラーカルテット（テナーサックス/ジョン・コルトレーン、ピアノ/マッコイ・タイナー、ベース/ジミー・ギャリソン、ドラムス/エルヴィン・ジョーンズ）で、歌手のジョニー・ハートマンとコルトレーンがフィーチャーされています。このアルバムは、今日でもなおわたしを感動させます。テナーサックスが、あんなふうに優しく、敬意を表したやり方でヴォーカルと絡み合うのを、わたしはそれまで聴いたことがありませんでした。コルトレーンがソロをとるとき、自分が、彼とリズムセクションの美しい会話を聴きながら壁に止まっているハエになったような気持ちになりました。わたしにとっては、このアルバム全体が、魅力的で官能的なラブソングです。
練習と勉強と演奏をたえまなく続けるうちに、ついにわたしは自分独自の歌を表現できることを見いだしました。

―Yuki：現在では、あなたはこの素晴らしいカリキュラムを、アメリカ、そして世界で実践されていますが、こどもたちにジャズを教え始めたのはいつ頃ですか？
―Riza：公式に始めたのは2002年頃です。最初は、すべての世代を対象としたプライヴェートレッスンから始まり、クラスルームレッスン（幼稚園から高校まで）、その後、ジャズ・アット・リンカーンセンター[12]の一部門に参加し、2015年に、初等一般音楽クラス（幼稚園から5年生まで）のための独自のジャズカリキュラムをつくりあげました。

全面的にせよ、部分的にせよ、わたしは教育のなかにつねにジャズを組み込んできました。理論、リスニング、採譜、読譜、あるいはブルースを演奏するときも、わたしの目標は、つねに、生徒たちにジャズという芸術形式に触れてもらうことです。ジャズは、アメリカの歴史において唯一無二、

かつ重要な経験から生まれた音楽ですが、伝統的に、アメリカの学校では教えられていません。わたしの深い信念は、生徒たちが、このかけがえのない、そして豊かなアメリカの文化のルーツに触れ、繋がることなのです。

―Yuki：独自のカリキュラムを生み出す過程や、その始まりの段階において、印象に残っているお話や大変だったことはありますか？
―Riza：わたしが、この“I Have A Song Inside My Heart”というカリキュラムをつくりあげるのに、公的にエネルギーを注ごうと決心したとき、乗り越えるのがもっとも難しい問題は、自分の仕事が世界の目にさらされることへの怖れだと考えました。とても素晴らしいサポートチームとともにいるときでさえも、もしあなたがなにかを生み出そうとするならば、そうなると思います。頼ることのできる人は誰もいません。あなたの心、そして仕事、そしてエネルギーは、すべての人の目に裸でさらされることになるのです。

わたしは、自分がなぜ、そしてなんのためにこれを行なっているのか、もう一度思い出さなければなりませんでした。わたしは、こどもたちが、自分自身の声を見出し、アメリカの歴史と文化にとって大切な、ジャズという芸術の様式につながることで、勇気を出してほしいという自分の深く熱い想いを再確認しました。
そして、「**もし君がそれをつくれば、彼はやってくる**（If you build it, they will come.）[13]」という言い回しは、真実だということに気がつきました。
自分のつくりあげたプログラムの、まさに核心の部分が、まさにプログラムをつくりあげる過程にいた自分自身に対しても語りかけていることに驚いたのです。

―Yuki：こどもにジャズを教えることについてのあなたの思想に影響を与えた人がいれば教えていただけないでしょうか？
―Riza：パートナーであり、ジャズトランペット奏者のマーカス・プリントアップ[14]の名前を挙げたいと思います。彼は、聴いている人々にその主題について何かを与えるだけではありません。彼は、聴いている人々の演奏/知識のレベルにかかわらず、音楽の中に連れていき、経験させるのです。彼のマントラは、「ジャズはフィーリング」で、彼の教え方にはそれがはっきりと示されています。

マーカスは、よく生徒たちに、彼がやっていることを真似して歌うようにいいます。ブルースラインを、心をこめて、意図的にベンディングノート[15]を用いながら始めることが多いです。彼の目的は、聴いている人々に音楽の深い感情を身体にしみこませてもらうだけでなく、彼ら自身が表現していることが、美しく、かけがえのないものであることを感じてもらうことなのです。彼は生徒たちとつながる特別なやり方を持っています。決して見下した言い方をせず、生徒とともにいるのです。

ほとんどの生徒たちは、彼が演奏するのを聴くと、彼とつながります。それは、彼が傷つきやすい自分をさらけ出し、完全に心からすべてを表現しているからです。そして彼が楽器を通しておこなっていることは、生徒や、世界中の聴衆とのやりとりのなかでおこなっていることだからです。

―Yuki：もし教育者たちに伝えたいことがあれば自由にお話していただけないでしょうか。
―Riza：教育者として、わたしたちは生徒の成長を見るのが喜びなので、レッスンを計画し、生徒たちを育成し、彼らの練習に責任を持つことに尽力しています。だからこそ、時々わたしたちは、たとえば、なぜ何人かの生徒たちは一緒にやろうとしないのか理解できずにストレスを溜めてしまうことがあります。また、あまりにも多くの要求がありすぎたり、思い描いたように物事が進まなかったりすると、ぐったり疲れ切ってしまうこともあります。

わたしは、以下のことを心に刻んでおく必要があると考えています。それは、ひとたびわたしたちが「教える空間（teaching space）」に足を踏み入れたなら、わたしたちは、生徒の人生においてなにがしかの影響を与える機会を与えられているということです。わたしたちの教育者としての役割は、唯一無二で、大切なものです。練習曲を繰り返したり、テクニックのチェックをしたり、譜読みをしたり強弱をつけたりすることだけでなく、わたしたちは、生徒たちの人生のなかで、音楽を通して美の種をはぐくむ場所と呼ばれる特別な場所にいるのです。

一度、誰かが、わたしたちが教室やスタジオの外で、どのくらい生徒たちに音楽的に影響を及ぼせているかという話題を切り出したことがありました。わたしの意見に賛成する人はいませんでしたが、自分自身の経験から、それはわたしたちがどれくらい生徒とつながり、かかわっているかによると思いました。すこしたちどまって、あなたの人生に大きな影響を与えた先生や指導者を思い起こしてみてください。彼らや、彼らが教えていた科目にあなたを結び付けたものはなんだったでしょうか？彼らの教えるスタイルでしょうか？科目の内容についての彼らの情熱でしょうか？あなたと話すときの話し方でしょうか？あなたをひきつけたものは何ですか？

わたしたちの生徒がレッスンを継続しなかったとしても、彼らのなかに、芸術に対する愛情ではないにせよ、感謝の気持ちを育むことで、同じ種を植えることはできないでしょうか？そうすれば、彼らは将来芸術家のパトロンになるかもしれません。もしかしたら、彼らにとっての音楽は、人生が苦境に陥って、休息を必要としたときに、帰ることのできる幸福な場所になりうるかもしれません。

わたしが以前一緒に働いたことのある、ある教師のグループは、彼らがすでに作っているルールのリストを編集し続け、そのルールの通りに学生を従わせようとして、いつもストレスを溜めている人たちでした。そのリストはものすごく長くなり、生徒と保護者は不満を言い始め、最後には去っ

ていきました。音楽の心も消えてしまったのです。

わたしは、以下のような提案をしました。すなわちその提案とは、音楽家として、（演奏されている音や完璧なフレーズといったものを超えたところにある）わたしたちの目標とは、つきつめていえば、聴衆とつながることだということです。演奏者と聴衆が完全につながるときほど美しいものはありません。それはまるで、空間全体が一緒に呼吸しているようなものです。

これらの瞬間においてわたしたちがおこなっていることで、わたしたちが教室/スタジオにおいておなじようにできることはなんでしょうか？わたしたちはただ生徒たちを楽しませているだけでしょうか？フレーズの最後の最後まで、聴衆が息をのむしかないような経験をもたらす要素はあるでしょうか？

彼らが学んでいる歌のなかで、わたしたちはどのようにかれらとかかわることができるでしょうか？作曲者たちに関する楽しいエピソードや歴史に、わたしたちはどのように彼らをつなげることができるでしょうか？将来は、わたしたちの共同体に貢献する市民になる、いまわたしたちが育成している若い人たちのなかに、どのようにすれば本物の好奇心を育てることができるでしょうか？

これらの疑問は、わたしがつねに自分自身に問いかけることが大切だと思っているものです。
これらの問いはニュアンスに富んでおり、さまざまに異なる解釈をし続けることができると思います。
（2020年10月19日）

３．おわりに

ジャズという音楽をどのように教えることができるかについては、こどもに限らず、さまざまな文脈で議論されてきたテーマである。それはまた、自分を表現することを他人が教える、ということをどのようにとらえるかという普遍的なテーマでもある。

社会学者のサドナウは、みずからがジャズピアノを習得した過程を研究対象として、興味深い分析をおこなっているが[16]、プリントアップ氏が述べる、「自己を表現する」「自分の声、歌を自分のなかに見つけてもらう」ということは、教師自身がつねに合わせ鏡のようにして自らの姿を映し出されるような試みであると思われる。そして、そこで鍵となっているのは、ジャズという音楽の形式だけでなく、それが生み出されてきた背景にある歴史に、生徒をコミットさせるというコンセプトであると考える。

プリントアップ氏のカリキュラムは、「なんだか難しくてよくわからない」と敬遠されることも多いジャズという音楽を、ちいさなこどもが身体を使って感じることができるように工夫が凝らさ

れており、大人にも十分学びごたえのあるものであると同時に、音楽の形式だけでなく、歴史的な背景も含めて総合的に学ばせようと意図している点で、豊かな可能性を内包しているのではないかと考える。

アメリカと日本の文化的・歴史的な背景の違いも考慮にいれる必要があるが、今後も、ジャズ教育、とりわけこども向けのカリキュラムの可能性を探りつつ、国内外の実践や研究についても調査を進めることを課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するきっかけになったのは、コロナをめぐる状況で、演奏の機会や仕事が次々とキャンセルになる中、NY在住のKatsumi, W, Fergusonさんがオンラインクラスに誘ってくださったことでした。思えば、Katsumiさんに初めてお会いしたのも、2007年8月に山口県萩市でおこなわれた5日間のジャズのワークショップでした。素晴らしいミュージシャンである講師たちや仲間たちと密度の濃い時間をともにすることで、ジャズ、そして音楽に対する考え方や人生が変わったという意味では、あのときにすでに何かが始まっていたのかもしれません。こどもたちのきらきらしたまなざしや、こどもたちをみる講師の先生方の優しく厳しいまなざしを、いまでも鮮明に覚えています。

こどもたちが音楽の道に進むと進まざるとにかかわらず、人生において印象に残る時間になるだろうと、そのときに強く感じました。

今回のオンラインクラスでは、講師のRizaはもちろん、一緒に受講した先生方にも、たくさんの笑いと気づきを与えていただきました。また、インタビューの翻訳に関しては、音楽家の石川翔太さんに多大なご協力をいただきました。

いつも鋭い質問でわたしをたじろがせてくれる英会話の生徒さんであり、こどもにジャズを教える試行錯誤のモニターになってくださっているすみれさんをはじめ、ヴォーカルとピアノの生徒さんたちにも心より感謝いたします。

---

1 “I Have A Song Inside My Heart”
公式ウェブサイト：https://ihaveasonginsidemyheart.com/（2020年11月30日取得）
ジャズハープ奏者・ジャズ教育者であるRiza Printupによって2015年に設立された、こども向けのジャズ教育の実践、研究、教材作成などを行うプロジェクト。設立者、プログラムコンサルタント、アカデミックコンサルタント、専属伴奏者、専属イラストレーター、開発兼助成金申請書類執筆者の6名からなるチームで運営されている。サマーキャンプやこども向けジャズコンサートの開催などもおこなっており、現在、NY、シカゴ、日本に活動の拠点がある。

2 さまざまなジャズミュージシャンに演奏され、定番となっている曲のこと。ジャズミュージシャンによっ

て作曲された曲だけでなく、ミュージカルやポピュラーソングなども含まれる。

[3] https://ihaveasonginsidemyheart.com/our-mission（2020年11月30日取得）
また、この前にはカリキュラム全体の理念として、以下のような記述がある。
「このカリキュラムにおけるわたしたちの使命は、若い聴衆に、ジャズという手段を通じて、かれらの個人的な真実をたしかにし、かけがえのない、素晴らしい自分の個性を抱きしめ、自分自身を表現する勇気を与えることです。」

[4] https://rizaprintup.com/about-press（2020年11月30日取得）
Riza Printup；インディアナ大学音楽科において、スーザン・マクドナルドのもとでクラシックハープを学ぶ。同時にジャズをデビッド・ベーカーに師事する。シカゴにあるコロンビアカレッジにおいてジャズの勉強を続け、音楽芸術の学士号を取得。のちにジョージア州立大学音楽科において、修士課程を修了した。こども向けのジャズ教育カリキュラムを発案し、実践している。

[5] WHC（World Harp Congress）；公式サイト　https://worldharpcongrss.com/（2020年11月29日取得）
1981年に発足し、1982年に法人化した、ハープ奏者のための非営利団体。

[6] 原文は*through* their music *with* their listenersとなっているため、イタリック体を反映し、見やすいよう太字にした。

[7] Deborah Henson-Conant;1953年にアメリカ、カリフォルニア州に生まれる。ジャズハープ奏者、作曲家。エレクトリックハープを用い、さまざまなジャンルの音楽を融合し、新しい境地を切り拓いたことで知られる。

[8] Dorothy Ashby；1932-1986。アメリカ、ミシガン州生まれ。本名、Dorothy Jeanne Thompson。ジャズハープ奏者、作曲家。それまでジャズを演奏する楽器としては認知されていなかったハープという楽器を用いた表現を切り拓いた。重層的な差別構造のなかにあったジャズの世界にあって、ハープという楽器であったことだけでなく、アフリカン・アメリカンの女性であったことは、多くの苦難を伴うものであった。
Alice Coltrane；1937-2007。アメリカ、ミシガン州生まれ。ピアニスト、オルガン奏者、ハープ奏者、歌手、作曲家。1965年、サックス奏者ジョン・コルトレーンのバンドにマッコイ・タイナーの代わりにピアニストとして参加。翌年、ジョンと結婚したが、1967年にジョンは肝臓癌で亡くなった。1970年、インドに旅をし、指導者（guruグル）に出会い、名前をTuriyasangitanandaと改名する。Turiyasangitanandaは、「超越的な神の高次の祝福の歌」という意味である。
Stella Castellucci；1930年、アメリカ、ロスアンジェルス生まれ。ジャズハープ奏者。1953年、歌手、Peggy Leeのツアーに参加。彼女のアルバムにもたびたび参加している。

[9] comping；ジャズの即興演奏時のピアノやギターの、コードによるコード伴奏のこと。

[10] 原文はイタリック体となっているため、斜体、太字にした。
アルペジオ（分散和音）やメロディー、コードを常に一緒に演奏するハープにおいては、これらを別々に理解し、演奏するために、それまでとは違う奏法の訓練が必要だったと推察される。
なお、この箇所の解釈に関しては、音楽家、石川翔太氏に教示を受けた。

[11] John Coltrane & Johnny Hartman;1963年にインパルスからリリースされたアルバム。

[12] Jazz At Lincoln Center；略称JALC。
芸術監督は、ジャズトランペット奏者のウィントン・マルサリスであり、彼が率いるジャズ・アット・リンカーンセンター・オーケストラは世界中で公演をおこなっている。

[13] 1989年のアメリカ映画、「Field of Dreams(フィールドオブドリームス)」のなかの有名な台詞。もともとは“they”ではなく”he”。日本語では、「為せば成る」に近いニュアンスだと思われる。

[14] Marcus Printup；ノースフロリダ大学ジャズプログラムを修了。
ベティ・カーター、ウィントン・マルサリスなどと共演。１９９３年よりジャズ・アット・リンカーンセンター・オーケストラのメンバーである。

[15] bending notes;　なめらかに音のピッチを変えながら演奏される音。

[16] D. サドナウ. 鍵盤を駆ける手：社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門. 徳丸吉彦・村田公一・卜田隆嗣訳. 新曜社. 1993年.

参考文献

・D. サドナウ. 鍵盤を駆ける手：社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門. 徳丸吉彦・村田公一・卜田隆嗣訳. 新曜社. 1993年.

・Jacob Koller. PianoBop；All-In-One-Lesson Book Level１～３. 渋谷かおり訳. Jacob' s International Music School, Inc. 2020

・Jim McNeely. The Art Of Comping. 愛川由香　訳. 株式会社エー・ティー・エヌ. 2002.

・Mark C. Gridley. Jazz Styles: History and Analysis. Prentice-Hall, Inc. 1978.

・Riza Printup & Marcus Printup. Theodore and Hazel and the Bird.RiMarcable Publications.NY.2016.

・Riza Printup. The Great Big Spider & Waterspout Blues. RiMarcable Publications. LLC. NY. 2019.

（ひだか ゆき ：非常勤講師）